

『別歌百首』の成立とその背景

武井和人

一 はじめに

ここ数年、小論の筆者は、一条兼良(1402~1481)の諸著作を追跡して来たのだが、そこで、八伝兼良作¹と称されるいくつかの作品があることに、あらためて気付いた。『古今三鳥剪紙伝授』²『榻鴨暁筆』『中書王物語』『鴉鷺合戦物語』『精進魚類物語』『若氣嘲哢物語』『執金剛神縁起』『酒飯論』『ねさめの記』『和歌題林抄』などがそれであるが、小論で述べようと思ふ『別歌百首』もその一である。本書が兼良作でないことは、比較的容易に想像しうるので、小論では、文学史における位相を中心に考へて行くことにしたい。なほ、本書は未翻刻資料なので、追つて翻刻・紹介したいと思ふ。

二 研究史概括——序の意味——

本書については、早く福井久蔵氏が「永享二年二条太閤と一条太

閤を撰び出し、家々の口伝の歌を抜き新註を加へしもの。始の歌は『うらやまし……』の詠なり。寛永二年六月の一写本南葵文庫あり」(『大日本歌書綜覧中』八不二書房¹¹昭2・10¹²)と述べてゐるが、井上宗雄氏の次の整理が、今のところ唯一の業績といへよう。

書陵部・神宮文庫・旧南葵文庫等に写本一冊で伝わるが、書陵部本には、巻頭に、

此集永享二年に二条の太閤と一条の太閤と撰び出し家々の口伝集なりと云々

とあり、第一に後鳥羽院の「うらやまし……」以下、著名な古歌(略)を、後鳥羽院御口伝とか野守鏡とか諸説を掲げて注し、人丸の「ほのく」と……の歌に至る。尤も神宮本には持基・兼良云々の文はないし、かなり荒唐な説も引いており、仮托の書であろう。しかし永享頃にこの兩人が代表的な権門歌人であつたのは確かである。(『中世歌壇史の研究室町前期』八風間書房¹³昭36・10¹⁴)

この序(?)について考へるべき点は、二つある。

(1) 持基・兼良のことを「太閤」と呼んでゐる。「太閤」の通常の語義は、関白の位をその子に譲つた者、だが、多々良(大内)義隆の「一大閤号事」是は関白を息に持れたる御方ヲ称シ候但後成恩寺殿一条殿は息関白ましまさゞりし時より大閤と申候其は先例子細有て称申也大才博覧の御方にて御座候故に世に難し申候はぬよし被仰出候キ其分に而候哉」といふ問に対して、三条西実隆は「*此事本儀候 * 後福光園撰政イマタ関白の父タラサル時大閤ト称候キ是世ノユルス所也但不甘心之由成恩寺関白記シヲカレ候後成恩寺ハ関白ノ父トシテ大閤ト称シ申キ」(『有職問答』八勘返状の形式をとるV一)と答へてゐる。実隆は否定してゐるが、義隆問の如き通念が専ら行はれてゐたことも十分考へられる。従つて、兼良が「太閤」と呼ばれうる素地は、関白を辞した享徳二年(一四五三)あたりから既にあり、本書成立の上限も、その頃に求めることが出来る。

(2) 持基・兼良の共編とした意図 井上氏のいはれる如く、永享期の権門歌人は、確かにこの兩人に落着かうが、「永享二年」と実に限定的に△時▽を示してゐる背景には、やはり何かあると思はれる。筆者に解決の妙案があるわけではないが、一つ気になることはある。永享初年の頃、兼良の昇進は停頓の観があつた。永享四年(一四三二)八月十三日、兼良は撰政の詔を拝したが、これは義教を左大臣にするための一時的措置に過ぎず、果して、同年十月に辞退させられ、持基が還補された。加へて、兵仗・牛車の宣下もないといふ異例、撰政としての出仕もなかつた。貞成親王

も「一条不及拜賀。無念事也」(『看聞御記』永享四年十月廿六日条)と記してゐるやうに、兼良にとつても「無念」だつたらう。つまり、永享初年の持基と兼良は、政敵といつてもよい状態だつたのである。序を書いた某が、そこまで考へて(あるいは読者に悟らしめるやうに)この一文を加へたのかどうか、はつきりしないけれども、以上の背景は、視野にとどめて置く必要がある。

三 伝本と分類基準

まづ、管見に入つた伝本を掲げ、その簡単な書誌を記して置かう。

〔第一類||非省略本〕

① 井上宗雄氏蔵本 『国書総目録』未載。26・5×20・2 cm。『高藤物語』と合綴。奥書・識語等なし。江戸初期写。以下、歌番号・引用はこの本による。

② 島原公民館松平文庫蔵 『列歌百首』本ハ141・33V
・6×20・1 cm。序が巻末に置かれてゐる。江戸初期写。

③ 神宮文庫蔵本ハ3・275V 25・4×18・2 cm。村井古巖奉納本。江戸初期写。

〔第二類||省略本〕

④ 東京大学総合図書館蔵本ハE31・1377V 23・3×16

・9 cm。旧南葵文庫本。奥書が「寛永二年六月十一日 終」とあるが、実際の書写は江戸中期か。

⑤ 宮内庁書陵部蔵本ハ鷹・254V 鷹司本。23・6×16・8

cm。奥書が「于時享保二丁酉年八月中八日写之」とあり、この時の書写と見做してよからう。表紙見返しに付箋が貼られ、なかなか興味深い記事が見える。

蚊田蒼生子書入拵本古今和歌集袖書云

一条関白兼良公博聞強記倭漢之才人故無師而欲説古今集

雖説義不通慨然咲曰一関之市必立之平一卷之書必立之

師況歌道之奥乎竟噓臍就冷泉持為卿学三代集之

秘説乃賜千書曰自今可為当家之羽翼云々其千書曰至今

存冷泉家也……△A▽

(略)

考兼良公抄云或人貫之真筆集持參覽之云当流ハ天福本證本仍不止

被返之此通ノコアリ仍不為多用尤ノコ也……△B▽

△B▽でいふ『兼良公抄』が何か分らないが、△A▽の特に前半は、『後成恩寺禪閣行跡』(東山御文庫記録)の「一歌道相伝之儀……別無師範但冷泉大納言持為卿為家礼有通志之事」に相通ふ所があり、注目すべきである。以下第二類の引用はこの本による。

⑥ 天理図書館蔵「別家百首」本ハ911・2・915V 23・9×17・3 cm。江戸中末期写。

⑦ 久曾神昇氏蔵「和歌百首注」本 未見。三谷栄一氏「新資料より観たる竹取物語」(『国学院雑誌』昭14・2)による。引用箇所から、第二類と判別した。

この他、素行文庫にも目録によると一本蔵されるらしいが、未調査である。

次に、伝本の分類基準である△省略↑↓非省略▽が、比較的よくあらはれてゐるものを、典型として示すことにする(なほ歌序も、面系統で若干の相違が認められるが、本質的な相違とは考へられないので、省略した)。

第一類||非省略本

第二類||省略本

29 かゑるさの物とや人のなかむらん待夜なからのありあけの月 (定家)

△A△恨変恋とあり△B△人はかな △A△恨て変する恋とあり自讃
たこなたへかよへは帰るさの物 歌のことし
とやのみやなかむらん我かたは

空たのめにていつも待夜なから
こそ有明の月を見れ此哀をは
そなたにはしらしと也

ただ厳密にいふと、「人はかなた……」が即ち『自讃歌(注)』である、とはならないし、『自讃歌(注)』ならざる何ものかかもしれないのだ。従つて、△(自讃歌注ノ本文ヲ)省略↑↓非省略▽といふ図式に、ただちに置き換へるのは考へものなのである。もう一つ、仮に第二類||省略本のみを机上に置いた一読者は、「自讃歌のことし」といふ注(?)に対して、どう対処したらいい(乃至しうる)のか。少くとも、第二類は読者に対して甚しく不親切なスタイルである、とはいへよう。以上の二点は、課題として残して置く。

四 出典とその問題点

本節では、採られた歌とその出典調査を報告し、個々の問題点について、私見を述べてみたい。歌は、出典を明確にしえたものは、初句を「」に入れて示し、未詳分は全文を引いた。なほ、出典は網羅的ではなく、主要なもの及び視野にをさめるべきものに限定した。また、原拠と考へられる出典名を最初に置くやうにとめた。

① 後鳥羽院へ15首

- 1 「うらやまし」遠島百首・春12、増鏡・新島守
- 2 「里人の」遠島百首・春5
- 3 「けふとてや」遠島百首・夏1
- 4 「遠山路」遠島百首・春11
- 5 「我こそは」遠島百首・雑32、増鏡・新島守
- 6 「とにかくに」遠島百首・雑29
- 7 「かそふれは」遠島百首・冬17
- 8 「かきりあれば」遠島百首・秋13（第三・四類独自歌）
- 9 「とはるゝを」遠島百首・雑10（第一類コノ歌闕）
- 10 「桜さく」自讃歌、建仁三年釈阿九十賀、御集、新古今99、近代秀歌、詠歌大概、時代不同歌合
- 11 「露は袖に」自讃歌、新古今470
- 12 「見るまゝに」自讃歌、新古今989
- 13 「みつかきや」自讃歌、御集、玉葉2735

② 定家へ20首

- 21 「あけてなを」拾遺愚草・韻歌百廿八首和歌・旅
- 22 「年もへぬ」新古今11442、六百番歌合・恋二・五番左、拾遺愚草、自讃歌
- 23 「あちきなく」新古今1196、拾遺愚草・二見浦百首、自讃歌
- 24 「来ぬ人の」続古今417
- 25 移りけりよしましたさらはなからへよたのみあたなる君か名もおし
- 26 「たのむ夜の」拾遺愚草・下・恋
- 27 されはこそ人かへりけれ浅茅原ねたくや今宵露もこほれつ
- 28 「消侘ぬ」新古今1320、千五百番歌合・一一九一番右、拾遺愚草、自讃歌
- 29 「かゑるさの」新古今1206、拾遺愚草・閑居百首、自讃歌
- 30 「かわれたゝ」六百番歌合・恋一・廿七番左、拾遺愚草
- 31 花さかはつけんといひし宿なからこてふに似たり春風そふく
- 32 「思ふ事」御伽草子・十本あふぎ（穂久邇本）
- 33 「袖にふけ」新古今980、拾遺愚草・下・雑、三体和歌、自讃歌
- 34 「出るとも」風雅2066・夢窓国師、夢窓国師御詠草
- 35 「我恋は」壬二集（家隆）・百首和哥洞院撰政家・不遇恋、定家家隆五十番歌合・卅五番

- 14 「人心」遠島百首・雑21
- 15 「なき人の」自讃歌、御集、新古今801、近代秀歌、詠歌大概

* 後鳥羽院の出典は、『遠島百首』と『自讃歌（注）』（『新古今集』では13の場合説明がつかない）の二書と思はれる。また『遠島百首』の伝本は、田村柳菴氏「遠島百首の伝本について」（和歌文学会例会発表、昭56・5）によると四系統に分けられるが、8・9から見て、本書の編者は、第三（乃至四）類の一本を用いたやうだ。なほ、歌番号も同氏発表資料によった。

② 式子内親王へ5首

- 16 「なかもつる」新古今52、正治二年初度百首・春、三百六十番歌合、定家八代抄、定家十体・濃様、自讃歌、式子内親王集
- 17 「わすれては」新古今1035、定家十体・幽玄体、自讃歌、式子内親王集
- 18 「きりの葉も」新古今534、正治二年初度百首・秋、三百六十番歌合、定家八代抄、自讃歌、式子内親王集
- 19 「なかも侘ぬ」新古今380、正治二年初度百首・秋、定家八代抄、時代不同歌合、自讃歌、式子内親王集
- 20 「それながら」新古今368、定家八代抄、自讃歌、詠歌大概、式子内親王集

* 原拠を一応『新古今集』と考へたが、あるいは『自讃歌（注）』かもしれない。

- 36 おもひかねその里人にことゝはむおなし岡への松は見ゆやとおもかけは」六百番歌合・恋一・卅番左、拾遺愚草
- 37 「うちわたす」拾遺愚草、正治二年初度百首・春、続古今63
- 38 「高砂の」定家家隆五十番歌合・廿八番
- 39 「ひるは来る」新古今1371・読人不知
- 40 「定家の場合、原拠を一二には限定しえない。『新古今集』『拾遺愚草』『自讃歌』などがその主たるものだらうが、(36)・(39)の『定家家隆五十番歌合』や、かなり怪しいものの32の『十本あふぎ』など、その幅は極めて広い。さらに問題なのは、4首の出典未詳歌もさることながら、34・35・40の誤伝歌であらう（なほ、25は、『拾遺愚草』皇后宮大輔百首・逢不遇恋の訛伝、27は、『鴨長明集』恋・成疑心恋の誤伝、36は、『藤川百首』（定家）恋・初尋縁恋の訛伝かもしれない。特に34は不可解で、『風雅集』の前後に配列されてる歌人に、定家の名は見えない。あるいは別の原拠があるか。

④ 良経へ13首

- 41 「いにしへは」千五百番歌合・一二五番右・通光
- 42 おもへとも思はぬとこそおもふらめさりとてはまたあり明の月
- 43 「浪そよる」六百番歌合・恋三・廿一番左、月清集
- 44 花もりのきひしかりけるほと見えて手折めおほき山桜かな
- 45 こすの間にひとりや月のふけぬらんひころの袖の涙もとめて
- 46 いかさまに椎の下葉は秋なから色かはらはと露もうらみむ
- 47 「やすらひに」六百番歌合・恋三・十三番左、月清集

48 そのまゝに我うちふすとかたれ月をくりし人のかゑりいらすは

49 「人すまぬ」新古今1599、月清集、自讃歌

50 「春日山」新古今748、月清集、自讃歌

51 「見るたひに」後拾遺1019・懐寿

52 くもれたくなかむるからにかなしきは月におほゆる人の面かけ

53 たゝ涙竹を夜の間にそめつらんあねといもとはおなし世中

* 良経の場合、先目につくのが、42・44・45・46・48・52・53の
出典未詳歌である。なほ、52は、『新古今集』恋四・1270、八
条院高倉の「曇れかしながむるからに悲しきは月におほゆる人の面
影」の誤伝かもしれない。あるいは筆者の調査漏れかもしれないが、
少なくとも『月清集』には存しない。ただ、41・51の如き明々白々
な誤伝歌を念頭に置くと、良経作と考へない方が良いだらう。

54 只峯へ7首

55 「すみよしと」古今917

56 「有明の」古今625、百人一首、詠歌大概

57 郭公しての山路をはるくと鴉にくつはをこいにくるかな

58 さらはなとよのなみならて春の花の秋の夕にうきにもれすは

59 「奈良さかや」万葉3836、古今六帖・六、和歌董蒙抄、
袖中抄、和歌色葉、夫木抄・廿九

60 人の子はおやに似るなるものをとて恋しき時は鏡をそみる

61 さをしかの人野々すきはつをはないつかはいもか手枕にせ

* 忠峯も56・57・59・60の未詳歌が気になるところだが、55の如
き名歌(詳細は後述)もあり、凡そ不可解である、とはいへまい。

62 業平へ10首

63 「おきもせず」伊勢物語3段、古今616

64 「しなのなる」伊勢物語8段、新古今903

65 「武蔵野は」伊勢物語12段、古今17

66 「おもひあらは」伊勢物語3段

67 「むさしあふみ」伊勢物語13段

68 「とゑはいふ」伊勢物語13段

69 「年をへて」伊勢物語123段、古今971

70 「野とならは」伊勢物語123段、古今972

71 「思ふ事」伊勢物語124段、御伽草子・花鳥風月

72 「つゐに行」伊勢物語125段、古今861

* 原拠は『伊勢物語』である。

73 西行へ7首

74 「心なき」新古今362、山家集・上

75 「津の国の」新古今625、西行上人集、自讃歌

76 「あはれいかに」新古今300、西行上人集、近代秀歌(自
筆本)、詠歌大概、自讃歌

77 「なかむとて」新古今126、山家集・上、自讃歌

78 「昔おもふ」新古今697、聞書集、西行上人集

79 「月見はと」新古今938、西行上人集、自讃歌

77 「風になひく」新古今1613、西行上人集、自讃歌

* 原拠は『新古今集』である。

80 具親へ3首

81 「ときしもあれ」自讃歌、新古今121、正治二年二度百首・
春

82 「いまは又」自讃歌、新古今587、千五百番歌合・八六九
番左

83 「こからしよ」自讃歌、千五百番歌合・九四四番左

* 原拠は『自讃歌(注)』だらう。

84 雅経へ1首

85 「おもひ入」新古今1317・秀能^x、如願法師集^x

86 「つくは山」(周防内侍作トスルモ、新古今1013、重之集
ニ見ユル重之歌ナリ)

* 「つくは山」(これにも若干の注が付されてる)を加へると、
計百首になるので、あるいはこれも1首と数へるべきなのかもしれ
ない。81誤伝の理由は不明。

87 家隆へ3首

88 清見かた雪もうかはぬ浪の上に月のくまなるむら千鳥かな

89 「あまの川」壬二集・中・秋、六家抄

90 「嵐ふく」壬二集・中・冬、六家抄

* 『順徳院御集』に「きよみかた雲とまかはぬ波の上に月のくま
なるむらちとりかな」(統類従本)といふ歌が見え、82は、あるい
はこの誤伝か。

む

* 忠峯も56・57・59・60の未詳歌が気になるところだが、55の如
き名歌(詳細は後述)もあり、凡そ不可解である、とはいへまい。

91 有家へ3首

92 「花をのみ」自讃歌、統後拾遺358

93 「大淀の」自讃歌

94 「来ぬ秋の」自讃歌

* 原拠は『自讃歌(注)』である。

95 宮内卿へ2首

96 「かたえさす」新古今281、千五百番歌合・五〇二番左、
自讃歌

97 「月をなを」新古今423、仙洞五十首、自讃歌

* 原拠は『新古今集』か『自讃歌(注)』だらう。

98 赤人へ1首

99 「和歌の浦に」万葉919

100 慈鎮へ4首

101 「我恋は」新古今1030、正治二年初度百首・恋、拾玉集

102 「いつまでか」新古今379、正治二年初度百首・秋、拾玉
集、自讃歌

103 「我恋は」新古今1322、慈鎮和尚自歌合、拾玉集、後鳥
羽院御口伝、詠歌大概

104 かけ清き月より落る袖の雨に軒の山の端雲は秋の夜

* 原拠は『新古今集』だらう。

105 俊成へ1首

106 「昔おもふ」新古今201、長秋詠藻・右大臣家百首、自讃
歌

16	能因△1首▽	15	5	20	20	20	20
96	「山寺の」新古今116、能因法師集	△1	△2	△3	△4	△5	△6
17	道真△1首▽	△7	△8	△9	△10	△11	△12
97	「ひこほしの」新古今1698	△13	△14	△15	△16	△17	△18
18	貫之△1首▽	△19	△20				
98	「袖ひちて」古今2、貫之集						
19	人丸△1首▽						
99	「ほのほのと」古今409（左注……人丸）						

次に、歌人の配列とその歌数について、ある程度の規則性が認められるので、それを整理して置かう。

(1) 歌数が20首を1単位としてあるらしい。

(2) 新古今歌人が三群に分れてかたまつてゐる。

△……新古今歌人

△小計▽
△歌数▽

五 注文と諸書との関係

〔一〕 木戸孝範『自讃歌注』

第三節において、『自讃歌（注）』の省略があるかもしれないと記

第一類	<A>恨変恋とあり 人はかなたこなたへ かよへは帰るさの物と やのみやなかむらん我 かたは空たのめにてい つも待夜なからこそ有 明の月を見れば此哀を はそなたにはしらしと也	第二類	<A>恨て変する恋とあり 自讃哥のことし	孝範注	人はかなたかなたか よへは帰るさの物とや 詠らん我方は空たのめ にていつも待夜なから こそ有明の月を見れば 此哀をばそなたにはし らしと也
-----	--	-----	-------------------------	-----	--

ここですべての例を示すが、『自讃哥のことし』やそれに類する表現を、自であらした。

井上本	29 28 23 22 20 19 18 17 16 14 12 11 10 9	自讃歌	105 107 106 104 20 13 14 16 12 4 10 5 2 1
作者	院 式子 定家	第一類	第二類
第一類	A+B+C+D+E	A+B+C+D+E	A+B
第二類	A+B+C+D	A+B+C+D	A+B
孝範注	A+B+C+D	A+B+C+D	A+B

したが、実は、『自讃歌（注）』と思はれる部分が、正しく木戸孝範『自讃歌注』であつた。同書（以下『孝範注』と称することにす）については、井上宗雄氏「大東急記 自讃歌注釈・和歌十鉢（毎月抄）について」（『かがみ』12 || 昭43・3）の中で、「大東急本ハ」孝範が関東で注釈し、偃月老人が（多分転写したのを）所持し、それを某が明応二年（一四九三）九月に写したのである。……注釈者孝範は漢詩・古歌に通じた博学な人の如くである。……ともすると古人の事蹟を説話化し、それと結びつけて牽強付会な解釈に陥りがちであつた……行き方とは一線を画している」と述べられてゐる。また『自讃歌注』全体の諸本については、石川常彦氏『月花集拾遺温泉寺本自讃歌注』（和泉書院 || 昭56・10）に詳しいが、A△しまで分類される『自讃歌注』の中にあつて、『孝範注』はその一類にしか過ぎない、といふことは重要だらう。第三節の末尾で、第二類の不親切さを論じたが、右の如き『自讃歌注』の諸本状況を念頭に置くなれば、その感をより深くせざるをえまい。

なほ、注文が『孝範注』であるといふ事實は、筆者の質問に対する石川常彦氏の御教示によつて、はじめて知りえたのであつて、本項は、本来ならば石川氏が御発表されるべきところを、石川氏の御許可を得て、筆者が便宜上小論に組み込んだものである。

次にその典型として、第三節で示した29の場合を例示して置かう。

95	92	89	88	87	86	85	80	79	78	77	76	74	73	72	50	49	33
61	31	85	83	92	93	94	128	124	122	168	164	162	163	166	30	28	110
俊成	慈鎮	宮内卿	有家	具親	西行	良経											
A+B+D+F+G	A+B+C	A	A+B	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A+B	B+C	B	A
A+自	A+自	A	A+自	A	A	A+B+C	A	A	A	A	A	A	A	A+B	A+自	A+自	A
+E+FC+HD	B	A+B	A+B+C	B	B	A+C	B	B	B	B	B	B	B	C	C	B+D	B+C

* 自讃歌番号は、刊本宗祇注のもの。

例へば9のやうに、第二類本の自が意味するであらう箇所が、第一類本（A△E）と『孝範注』（A）とでは、必ずしも一致しないものの、重なる箇所は確かに存するのだから、おほむね、自非『孝範注』と見做して良いだらう。ただここで留意すべきは、85・87・89の『孝範注』におけるA'及びC'の取り扱ひである。といふのは、自が意味する以外の箇所では、『別歌百首』と『孝範注』にほぼ同文の注

が見られるからである。しかし、結論を先に述べると、この三例いづれも、一致してもそれ程不思議ではない体のものなのである。実際に抄記・比較してみよう。

85 『別歌百首』〈A〉深山曉月〈B〉三吉野は……をしき也〈C〉月と花とおなじくしやうする心なり(1)

〔孝範注〕〈A〉深山曉月と云題也〈C〉花月共に賞する心なるへし

※コノ歌、『和歌題林愚抄』『明題和歌全集』ノ「深山曉月」ノ部ニ入レリ。

87 『別歌百首』〈A〉水辺冷自秋〈B〉いまた来ぬ秋……むすふほとなる也(1)

〔孝範注〕秋よりも冷し自讀か注のことし(5)

〔孝範注〕〈A〉水辺冷自秋と云へる題也〈B〉いまた来ぬ秋……結ぶ程なるそとよめるへC〉廉中天地乾坤外といへるにすこし

かよふ心あるへき歌

89

〔別歌百首〕〈A〉雨後月〈B〉此哥かくれたる所なし……抜群牀に入られたりへC〉是は爰には……たかきかことく也(1)

〔孝範注〕〈A〉雨後月をとありへB〉此哥かくれたる所なし……抜群の牀に入られたり

〔A〕の場合はいづれも歌題で、85の※のやうなこともあるので、同文であつても訝る必要はなからう。ただ85の〈C〉は若干気になるが、これとても、歌の内容から比較的容易に導きうる注であるから、あ

188

新嶋もりとはあたらしき嶋もり也

〔注・板本附注系統〕*高岡市立図書館蔵本〈911・1・

202B

新嶋守とはあたらしき嶋守のこと也嶋に御座所にかりう嶋人參らせける程人、立帰らんとせられければなみ風あらく吹て舟の出へきやうなければ我こそ新嶋にとめ置にあらき浪風心して吹てかりうを急帰せとの心をよめるなり

〔注・統類従本系統〕*賀茂別雷神社三手文庫蔵泉亭本〈歌・以

家隆卿隠岐国へ参十日斗祇候申帰らんとし給に波間あらくて帰路仕かねてやすらふ所に我かく嶋守と成てありともなと科もなき家隆をは波風心ありて都へかへさぬそとあそはしける也俄に波かせしつかになりて渡海し給ふと也

〔注・国学院本〕*丸谷才一氏『後鳥羽院』(筑摩書房||昭48・6)所引

われこそはと云ふ肝要なり。家隆卿隠岐国へ参り、十日ばかりありて帰らんとし給ふに、海風吹き帰りがたければ、我こそ新じま守となりて有れ共、など科なき家隆を波風心して都へかへされぬとあそはしける。されば俄に風しづまりて家隆卿都へ帰られしとなり。

『遠島百首』諸注が説く家隆云々は、丸谷氏のいふ如く(前掲書)、『幻想』である。『別歌百首』は「人々」とばかりしてゐるもの、

へて問題にせずともよい。

それよりもさらに重要なことは、『別歌百首』と『孝範注』とのかくの如き密なる関係である。『孝範注』は、大東急本の奥書が伝へるやうに、正しく木戸孝範その人の注だらうが、とすると、『別歌百首』も、と考へるのが素直な想像である。しかし、『孝範注』は後世存外広く流布してゐた形跡もあり、即断はできない。『別歌百首』の作者はともかくも、第二類本の如き形態の系統もあるといふことは、ごく狭い文学的空間の中で当初は成立した、と考へざるをえない。『別歌百首』成立の背景については、以下でも考へるつもりである。

二 『遠島百首』諸注

本書の主要な出典の一つに『遠島百首』があることは、既に前節にて述べたが、『遠島百首』には中世の成立と思はれる注釈書が、数種伝来してゐる。田村氏前掲資料を基に、私に若干付け加へつつ、本書と諸注を比較してみよう。なほ、系統名を付した。

5 我こそはにる嶋もりよ沖の海のあらき浪風心してふけ

〔別歌百首〕我こそはをかんに可聞哥也都より後鳥羽院をなくさめに人々嶋へ渡りける時十日斗とめ給ひて帰らんとしける時舟はたまた出給へは浪風あらくたては此哥をあそはしける我こそはにる嶋守になりぬれ浪風もしづまりて都人をはかゑせかしとて此哥をあそはしける時俄に浪風静りて人々都にかへりけり(1)

〔遠島百首注・伏見宮本〕*宮内庁書陵部蔵伏見宮本〈伏

その構図は同じと考へてよい。その一方、中世には、『増鏡』新島守のやうに院の独詠と理解する人々(及び読者も)が、確実たるものである。とすると、『遠島百首』諸注の成立圏と『別歌百首』の成立圏とが、重なつてゐたとはいはないまでも、近接してゐたらしいことは、想像に難くない。ただ両者ともにその成立圏がはつきりしないのだから、位置を定めることは無理である。

三 『古今集』『百人一首』『詠歌大概』諸注及び『柿本備材抄』

『一禅御説』

これら諸書にまたがる好例として、次の一注を考へてみよう。

55 有明のつれなくみえしわかれよりあかつきはかりうきものはなし

後衣朝恋皆人の有明の月の出るによりて人も帰れば有明をうき物といへとも有明よりも暁こそうき物なれ此暁によりてこそ有明もあれ人もかへれとて暁はかりうきものはなしと詠りはかりはほとと云事也(1)

この『別歌百首』の注釈は、中世の注釈書群の中にあつて、次の二点において特異である。

(1) 表現主体を女性と解する。

(2) 定家・家隆のエピソード(後述)を記さない。

(1) について見るならば、八男性説⁹は『頸注密勘』に「是は女のもとよりかへるに、我はあけぬとていづるに、有明の月はいくもみえし、つれなくみえし也。其時より暁はうくおほゆともよめり。只女にわかれしより、あかつきはうき心也」(頸注)と見え、室町

期の注釈書にも「月と人と両方へ見るへし人を問行て門をあくるかと待にあけはせずして結句在明の月に成迄遂にあけもせてそのまゝむなしく帰るより暁程うき物はなしと思とりたる心也」(平松家本『古今集抄』)「つれなくみえしとは、あはずしてかへす人の心也。有明はひさしく残物なればそへたり。あはで帰歌也。惣の心は、よもすがら心をくだくを、もしやとしりて契人につれなければ、ちからなうち別てゆくに、有明の月ほのかにて心ほそき暁のさま也」(『二度聞書』)と見える。即ち、室町期には、八男性説が通説だったと思はれるのである。

ことは『百人一首』諸注においても全く同様である。

〔応永抄〕満基抄〕 * 久曾神昇・樋口芳麻呂氏『御所本百人一首抄』(笠間書院||昭46・12)

此哥はあはずして帰る心をよめり在明はひさしく残る物なればつれなくといひ侍り此つれなくみゆるは人の事也心は人のもとにゆきて終夜心をつくしていかてあはんと思ふに人はつれなくてはてぬれはいかゝせむと立別ころ有明の月のあはれもふかきをなかめつゝ帰るさまなりたとひあふ夜のかへるさなりともかゝるそらはかなしかるへきに結句あはてわかるゝを思ひわひて今夜の暁はかり世にうきことはあらしと思ふよし也……

〔長享本古注〕 * 吉田幸一氏『百人一首古注』(古典文庫||昭46・9)

……人のもとに来てあれとも、人のつれなくして、あはてわかるゝ、暁に、月のつれなくのこりたるを見て、人を月にひひなし

えまい。

次に(2)について見ると、定家が「これ程の歌ひとつよみいでたらむ、この世の思出に待べし」(『頭注密勸』密勸)と激賞して以後、「上品上生の哥也」(平松家本『古今集抄』)といった評価が定着して行くのだが、なほ重要なことは、いつとはなしに(恐らく室町初期あたりから)次の如き説話を付随するやうになることである。

〔古今集童蒙抄(兼良)〕 * 京都女子大学附属図書館吉沢文庫蔵兼良自筆本AYK911・23・I V

後鳥羽院の御時古今集の中面白哥を定家、隆に御尋有し時兩人なから此歌を撰申けるとなん

この説話の原型(但し人物・時代は若干異なる)は、『古今著聞集』巻五・和歌八陰明門院中宮の時六事の題を賜はりて定家隆同じ古歌を撰ぶ事に見え、平松家本『古今集抄』『二度聞書』『応永抄』『小倉山庄色紙和歌』『詠歌大概注(宗祇抄)』などにも見える。さらに、兼良は、『柿本備材抄』『一禅御説』の中で、繰り返しこの説話を記してゐる。仮に『別歌百首』が本当に兼良編であるならば、一言も触れないといふことはあるまい。

以上(1)(2)の視点から考へると、『別歌百首』の成立圏は、正統のそれ(例へば、二条家〔流〕、冷泉家〔流〕)といった如き)と異なるのではあるまいか。何か(誤解を恐れずにいふと)異端をさへ感ずるのである。さういへば、^二で検討した『遠島百首』諸注に、成立圏(時・人物・事情・享受)をうかがはせる奥書は、一切残されてゐない。

て、つれなくみえしわかれより、といへるなり……

〔経厚抄〕 * 島津忠夫・上條彰次氏『百人一首古注抄』(和泉書院||昭57・2)

歌の心、明ぬとて我は急き帰るに、月は明るも不知残るを見て、つれなきと云かくる也……

〔有吉本小倉山庄色紙和歌〕 * 有吉保・神作光一氏『小倉山庄色紙和歌』(新典社||昭50・4)

つれなくみえしわかれよりといふは人のところへいろくことなどはなとかはしけれともつるにうちとくるけしきもなくつれなきによりすこくとかあつきになりてたちかへり……

〔上條本色紙和歌〕 * 上條彰次氏『百人一首』『色紙和歌』本文と研究』(新典社||昭56・2)

……おもふ人の所へやくそくしたる事はなけれとももしや逢んとかよひきたれともその人つれなくて逢ねはむなしくたち帰るあか月の物うき事をかくはかりつらき事なしとよめる心なり……

さらに、『詠歌大概注』を見ると、管見に入つた諸注、

刊本宗祇注、書院部本宗祇注、尊経閣文庫蔵三条西公条講『詠歌大概』(13) 13・37・書、志村有弘氏蔵『詠歌大概』

は、『応永抄』と大略注文が一致するから、やはり八男性説なのである。

即ち、『別歌百首』のとる八女性説なるものが、中世にあつて(そして恐らく現在も)極めて特異な注であることは、疑ひを容れ

四 肖柏『春夢草』『九代抄』

まづ、『別歌百首』の能因歌の注を引かう。

96 山寺の春の夕へをきてみれば入逢のかねに花を散ける

此哥の下の句に入逢の鐘にと有かんなり此能因法師は津の国小染と云所に草庵を結ひていけるか休息の為に金立寺へ行て花を見てつほむよひらくよとはかり心におもひしに入逢のかねを聞て無常の心出来ていまゝてのころの花ちりけり(14)

この能因・小染→金立寺といふ付会(?)について、川村晃生氏が「この説は肖柏の連歌書『春夢草』に『撰州金竜寺にて、鐘の音花にむかしの夕かな/金竜寺はむかし能因法師入相のかねにはなぞちりけるとよみし山寺なり、かねの音今に昔の花の夕を残したると也』とあるのが比較的早く、以後近世において、一般的な説となった。しかし、同じ肖柏は、『九代抄』の中で、『津の国こそべといふ所のうへに建立寺といふ寺あり。それに行てよめり』(内閣文庫本)と記してきだかでない」(傍点引用者)と述べられてゐる。即ち、能因→こんりう寺の説が、肖柏その人自身の説かも知れないのである。川村氏があげられなかつた資料として、次の如きものを加へよう。

〔再昌草(三条西実隆)・十二・永正九年三月〕 * 『桂宮本叢書第十二巻』(養徳社||昭28・2)

夢庵より消息に金竜寺の花み侍しよし申されしかは返事きゝても身にしむ花の夕かな入あひの鐘の春の山さと

ともかくも、肖柏周辺にこの説が認められてゐたことは、疑ひえま

い。ただ、その流布範囲はそれ程広かつたとも思はず、常縁原撰本に最も近いとされる永青文庫本『新古今略注』やその後の『新古今聞書』にも、この説は見えない。

〔三〕〔四〕を総合すると、『別歌百首』の作者(乃至編者)として、肖柏周辺の連歌師(中世語でいふ「好士」)あたりが浮かび上つて来よう。

〔五〕 御伽草子『花鳥風月』及び『伊勢物語』諸注

第四節でも述べたやうに、業平歌の原拠は『伊勢物語』と思はれるが、とすると、中世のさまざまな『伊勢物語』諸注との関係が、当然問題になつてくる。

そこで、御伽草子『花鳥風月』とも関連があると思はれる次の歌を考へてみたい。

69 思ふ事いかてたゞにややみぬへき我とひしき人しなれば抑業平の一期に思食ける事は残りなく伊勢物語に聞えたるに何とておもふ事いわてたゞにやみぬへきとは有そと人ふしんの有に業平死去して後三十三年の吊の爲に嵯峨の釈迦堂にてさせんしけるに三条の右大臣のあふきに大ものさしぬききたる男子あり是を業平源氏かなと人あらそいける爰にやすき事あり其比出羽の国に花鳥風月とて二人の神子あり花鳥はあね風月はいもとなり是をめしよせとはせられよと人申けるさるほとに既に源氏かたにはあねの花鳥なり業平かたにはいもとの風月也梓にかけて此絵をといけるに絵にたかはぬ業平すてにあらはれ給て抑我は伊勢内宮外宮として陰陽二神衆生と一夜も契りを給

②③ 三、七、百、廿、三、人、なり……(傍点武井)

ここで、『花鳥風月』の中世における流布を、市古貞次氏「中世小説年表稿」(『中世小説とその周辺』八東京大学出版会 昭56・11 所収)から摘記して置かう。

康正三年(一四五七)十一月八日 花鳥風月双紙、予書本所へ進候也。(『山科家礼記』)

天正十七年(一五八九)六月廿日 興門御兒御乳人へ花鳥風月草子返之由小大夫申、渡之。(『山科』言経卿記)

文禄四年(一五九五)十一月 花鳥風月(室町時代物語大成3)

奥書

この他、上掲天理本が、筆者を飛鳥井雅俊(1462~1523)、画者を土佐光信(?~1469~1503?)と伝へられ、永正・大永ごろの写といはれる慶応義塾大学図書館蔵奈良絵本(外題「扇合物かたり」)も筆者を飛鳥井榮雅(1417~1490)息女一位局と伝へられてゐる。以上の如き流布状況をふまへつつ、真島美弥子氏は「この物語は山科家あるいはその周辺で作製されたものだと考えられないだろうか」と述べられた。この推定の是非について筆者に判断しうる力はないが、ありうることは思ふ。

ところで、②③については、他の資料にも同様の注が見える。まづ②だが、冷泉家流『伊勢物語抄』に「むかしとは、廿一日の間と書るが故にいふなり」と見え、その末書である『伊勢物語心敬聞書』にも「伊弉諾尊伊弉册尊の一女三男をうみ給ふ事廿一日の間也されは陰陽のおこり廿一日なるか故に業平好色の事と書付て昔と

ひ終に六道を出為也と我一期にかたらんとしつるか我とひとしき人なればあけにやなりなるとつるにかたらしいまはかくあらはるゝはかたるなるとてか様にそあそはしける業平の一期にちきりしかす三千七百卅三人なりさて業平を昔男子と云事生るも廿一日元服も廿一日なればかくなり(①)

この花鳥・風月のことは、『花鳥風月』と大略重なる。平出鏗二郎氏の要約を借りると、物語の前半は「萩原院(花園天皇のこと)の御とき、葉室中納言の策、雲上の男女集りて、扇合を催しけるが中に、山科の少将が出し、扇に、容貌美しき公家衆と、美麗なる上臈一人とを画きたるものあり。皆々、或は業平ならんといふものあれば、或は光源氏ならんといふもありて、遂に、花鳥・風月といふ、姉妹の巫女を招きてトはしめしに、巫女、梓にかけしに、業平ならんといひし人の問ふまゝに、業平とあらはれて……」といふ内容である。時代(情況)設定は全く異なるものの、花鳥・風月の役割は同じである。さらに細部にわたると、一致する点がいくつも見られる。

〔花鳥風月〕 *天理図書館蔵伝飛鳥井雅俊筆奈良絵本 八 91
3・5・1143 〱

……こゝにきたいものゝしやうすのみこ候もとはては、のはくろのものにて候おとゝひ候かあねをは花鳥いもうとをは風月と申て空とふとりをいのりおとし……〔業平〕われはこれてんちやう二ねん三月廿一日にたんしやうして……一しゆのうたにおもふこと……一しやうかいのあひたちきりをむすひし人の

云」と見える。

一方兼良は、『伊勢物語愚見抄』の中で「又十巻の抄(冷泉家流抄)世間に流布せり。……来歴ども引のせたる和漢の書典、一としてまことある事なし。……末学のともがらゆめく信用すべからず。邪路におもむかん事うたがふべからず」と、くりかへし全否定してゐる。といふことは、冷泉家流『伊勢物語抄』がそれだけ流布しかつ支持されてゐたことをも、物語つてゐるわけだ。実際、冷泉家流『抄』が、後代の文学に深甚なる影響を与へた事は、片桐洋一・伊藤正義氏に詳論がある。

ただ、〔四〕で、本書の作者乃至編者に肖柏周辺の連歌師を想定したが、肖柏の『伊勢物語肖聞抄』に、上文の如き注が一切見えず、この想定は少々苦しいかもしれない。

一方③だが、この数字には異説が多々ある。整理して次に掲げてみよう。

- 三七八四人 彰考館本『伊勢物語抄』
- 三三三四人 『いそさぎ』(赤木本)
- 三三三三人 書陵部本『和歌知頭集』、『花鳥風月』(天理本・文禄本)、『鴉鷺合戦物語』(文禄本・寛永古活字本)
- 三三三三人 『花鳥風月』(古活字本)
- 三〇〇〇余人 『伊勢物語難義注』
- 一〇〇〇人 『小町草紙』(天文14年本・寛永丹緑本・渋川版)

ともかくも「三七××人」といふ数字が、中世において最もポピュ

ラーなものだったことは確かだろう。

むしろ『別歌百首』のこの注で問題とすべきは、『伊勢物語』諸注で、花鳥・風月の説話を取り込んであるものが皆無なことである。筆者が知っていた諸注は次の通り。

- 書陵部本和歌知頭集・神風知頭正義集・冷泉家流伊勢物語抄・慶応本定家流伊勢物語註・彰考館本伊勢物語抄・伊勢物語愚見抄（初稿本・再稿本）⁽²⁹⁾・肖聞抄・宗長聞書・山口記（統類従本）⁽³⁰⁾
- ・推清抄（統類従本・天理本）⁽³¹⁾・直解・経厚講聞書（尊経閣本）⁽³²⁾・曼殊院本）⁽³³⁾・書陵部本心敬聞書・書陵部本堯慶聞書（八日・5日）⁽³⁴⁾・天理本平田墨梅筆聞書（913・32・149）⁽³⁵⁾・島原松平文庫本伊勢物語鈔（100・5）⁽³⁶⁾

といふことは、本条の注が、ある一本の注釈書によりかかるのでなく、注釈・説話のふきだまりであることを、如実にさし示してあることに他なるまい。

なほ、『新古今集』諸注（常縁注・兼載注・宗長注・宣賢注）及び『拾遺愚草』諸注（常縁注・実隆注・公条注）『六家抄』との関係はないと思はれる。

六 をはりに——室町文学史への一視点——

本書を文学史に位置づけるのは、さう容易なことではない。仮に、『新古今集』享受史乃至研究史の一齣としてとらへようとすれば、定家や良経の少なからぬ出典未詳歌が当然問題にならうし、業平の

ふ観点から、『雲玉和歌抄』をとりあげられ、「説話や注釈や体験談が、和歌創作と密接に結びついてゐる」と述べられた。同種のものに、近時全貌が紹介された『桂林集注』があるし、△注のある文芸△と広げるならば、本書や『六花集注』などを視野に収めることができるだらう。

その時代はといふと、堺海会寺の禅僧季弘大叔は「サネトモノ歌曰、ハコネ山ワガコヘクレハ水ノ海ノヲキフシマニ波ノヨルミユ、貞家曰、柿ノ下ノ后ハアルマイトホメラレタ、后鳥羽院時人、哥道達者、兵家落時即位也」と、（恐らく聞書として）書きとめ、蜷川家の某は、朝倉氏景書状紙背に『和歌色葉』を抄記してゐた。

徳田和夫氏の言を借りるならば、「室町の世」は「街談巷説で充満横溢していた」。本書はそのやうな意味で、（和歌といふ狭い世界における所産であるが）いかにも室町文学らしい作品と評しえよう。
(5/18/82)

△補記△

小論は、昭和57年度和歌文学会5月例会（於立教大学）にて、『別歌百首』の成立をめぐつて」と題して発表した内容に補訂を加へたものである。席上、御教示下さつた諸氏に御礼申し上げます。なほ、25・27・36・52の出典について、久保田淳氏より御教示いただいた。あつく御礼申し上げる次第です。

△注△

(1) 拙稿『古今三鳥剪紙伝授』伝本考——一条流古今伝授の成立をめぐつて——（『都大論究』第17号||昭55・4）で、基

扱ひも例外として処理せざるをえない。また、注釈書として位置づけようとするなら、その性格たるや甚だ不統一であるし、和歌を正しく解釈しようとする向きには、むしろ百害あつて一利なしだらう。しかし、いはば前代文化の糟粕をなめるといつた底の見方をこの際放棄し、岡見正雄氏のいふ△室町ごろ△の一顕現としてみるならば、その占る位置は、存外はつきりとしてくるのである。

そこで小論のまとめとして、次の二点から眺め直してみたい。

(1) 諸注のふきだまり

前節で述べて来たやうに、本書が実に雑多な注釈書の影響下にあらることは、疑ひえない事実である。ならば、その雑多なこと自体に意義を見出してはどうか、と思ふのである。筆者は、室町時代に、和歌に限らず△注釈といふ型の文学△がはじめて誕生したと考へるものだが、そこには、『古今集』『新古今集』『源語』『勢語』『自讃歌』といつた△作品の注釈△も無論あつたが、一方△作品ならざるもの注釈△もあつた。その一例が本書であり、別の好例が近年やうやく実態が把握されつつある『和歌座右』であらう。室町時代人の拡散しようとする意識は、右の如きスタイルの注釈をも受けいれるユトリを有してゐたのだ。見方を変へれば、己が地歩を固有しかつ主張してゐた文化なり文学の各々が、同じ地平に据ゑられうるやうになつた、と思へるのである。

(2) 和歌と説話

かつて鳥津忠夫氏は、「和歌と説話と——雲玉和歌抄をめぐつて——」（『国語国文』昭43・3）の中で、△自注のある文芸△とい

本的な問題を整理して置いた。

(2) 「永正の中比の事なるに」（第13・怨念・1・欲吞鳥蛇）とある（内閣文庫七冊本（211・189）による）ので、全体を兼良作と見做すのは無理だし、恐らく部分においても同様だらう。

(3) 「父已為関白、其子又必関白、父尚存、則称太閤」（『臥雲日件録抜尤』文安元年七月十二日条）「関白の父を太閤といふぞ」（『史記抄』二）

(4) 以下のことは、永島福太郎氏『一条兼良』（吉川弘文館||昭34・8）30~36頁に詳しい。

(5) 『定家家隆面御撰歌合』（後鳥羽院撰）とも。確かに誰もが見る資料ではなからうが、第三（乃至四）類本『遠島百首』を机辺に有してゐた編者にとつて、稀観本だつたとはいへまい。なほ、35の誤伝は、定家と家隆の左右を誤つたためかもしれない。

(6) 概要は、「十本の扇に描かれた絵に相当する歌を遊女に尋ねることを記した一種の解謎談……であるが、これを全部首尾よく解き当てたのは猿丸大夫の娘であつた」（『市古貞次』中世小説の研究 111頁）。当該箇所は「又こゝに、女はう、うみへ、いしをしつめて、なけく所をかきたる絵有、是はいかにと、はせ給へは……古今のうたにて候かと、おほせ侍りぬ 思ふ事、水のかしはに、ことゝへは、しつむにうくは、涙なりけり 水のかしはとは、うみにある、いしの事にて候と侍る也、此うたに、かなひたると、おほえ候」（『室町時代物語大成第七』239頁）。つまり典拠が『古今集』だと作品自体が宣言してゐる（ただしこれも誤伝）わけで、なにゆゑに定家作と編者が判定したのか、理解に苦しむ。

(7) 大東急本が最善本だらうが、本文を未だ精査してゐないので、以下三手文庫本によつた。

(8) 例へば、北村季吟が『八代集抄』で引く『自讃歌或抄』が、

- 実は『孝範注』であることは、よく知られてゐる。
- (9) 諸注の伝本について、山崎桂子氏より御教示を忝なくした。御礼申しあげる。
- (10) 久曾神昇氏『日本歌学大系別巻五』(風間書房||昭56・11)による。
- (11) 『古今集抄京都大学蔵』(臨川書店||昭55・4)による。
- (12) 片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題』(赤尾照文堂||昭56・8)による。
- (13) 久松潜一・土田将雄氏『詠詩之大概』(笠間書院||昭42・9)による。なお、土田氏『細川幽齋の研究』(笠間書院||昭51・2) 187~232頁参照。
- (14) 『詠歌之大概』(古典資料15)『すみや書房||昭45・12』による。
- (15) 拙稿『柿本備材抄』の成立——兼良の注釈の基底——『国語国文』昭56・11)参照。なほ、この説話についても、同稿で簡単に触れた。
- (16) 同氏『能因法師集・玄々集とその研究』(三弥井書店||昭54・6) 238~237頁。
- (17) 荒木尚氏『新古今略注』(笠間書院||昭54・10)による。
- (18) 同氏『近古小説解題』(横山重・巨橋頼三氏『物語艸子目録』八角川書店||昭46・7)所収。六七・花鳥風月。
- (19) この奈良絵本の伝来については、中尾堅一郎氏『奈良絵本との出会い』(天理書館『善本叢書月報』33||昭52・3)に詳しいが、「これらの奈良絵本はかつて大阪城内にあって、秀頼公と、淀君、側女らの慰み草に使われたものと思われる」といふ指摘は、注目すべきである。
- (20) ただし、慶長元和頃古活字本は「三千三百卅三人」に作る。松本隆信氏『解題』(天理書館『善本叢書』第三十七巻『古奈良絵本集』)八角川書店||昭52・3)を。なほ慶応本の本文は未調だが、挿絵は『太陽古典と絵巻シリーズIIIお伽草子』(平凡社

- ||昭54・7)に図版がある。
- (22) 同氏『室町時代物語「花鳥風月」考』(立命館大学)第436・436号||昭56・9、10)
- (23) 片桐洋一氏『伊勢物語の研究』(資料篇)『明治書院||昭44・1)所収。
- (24) 宮内庁書陵部蔵本A558・161Vによる。奥書に「右此本者自招月庵主心敬法印伝受之證本也」とある。
- (25) 注23に同じ。
- (26) 「冷泉家流伊勢物語古注をめぐって」(『伊勢物語の研究』(研究篇)『明治書院||昭43・2)所収)他。
- (27) 「謡曲と伊勢物語の秘伝——井筒の場合を中心として」(『金剛』第64号||昭40・5)他。
- (28) 『天理書館』善本叢書43『和歌古註集』(八木書店||昭54・7)所収。
- (29) 長尾一雄氏『定家流伊勢物語註』(『国文学論叢』第三輯『平安文学研究』と資料)八木文堂||昭34・11)所収)による。
- (30) 片桐氏前掲書(注23)の他、島原松平文庫蔵文明9年本A100・7V、天理図書館蔵文明12年本A913・32・4105V、蓬左文庫蔵文明12年本A107・64V、続類徒本等を参照した。
- (31) 『経厚講』伊勢物語聞書『曼殊院蔵』(京都大学国語国文学資料叢書五)『臨川書店||昭53・3)による。
- (32) 文明12年本『肖聞抄』を基に、独自の説を相当を加へてゐる。75段末尾に「永禄八年迄六百八十七年也」とあるので、一旦その時点で成立したか。
- (33) 同氏『室町ごろ』(『国語国文』昭26・11)『室町ごろ』(『中世文学資料集』八角川書店||昭53・9)を。ただ岡見氏は、注釈に全くといって良いほど関心をよせてゐないが、これはむしろ、我々に課せられた宿題だと思ふ。
- (34) 宮田正信・山本利達氏『和歌座右』の実態』(『滋賀大学教

- 育学部紀要』第28号||昭54・3)
- (35) 『桂林集注』疎竹文庫蔵(京都大学国語国文学資料叢書三十二)『臨川書店||昭57・4)
- (36) 『庶軒日録』文明17年7月某日条。
- (37) 室町幕府政所代。親元(1533~1588)は歌人として著名。今、『大日本古文書』家わけ第二十一『蜷川家文書之一』(東京大学出版会||昭56・11)及び『日本歌学大系第参巻』を以つてその所在を示すと次のやうになる。なほ「」は原本(内閣文庫蔵)における順序。
- 一九六号・朝倉氏景書状紙背(第18集29)……p.110
- 一九七号・同(第4集19)……p.108~109
- 二二〇号・同(第18集38)……p.109~110
- ただ、前掲書で「本文(一一九六号)ハ第二二〇号紙背歌書ニ続クモノナラン」といふのは誤り。
- (39) 同氏『お伽草子時代の説話——『碧山日録』の説話享受から——』(『国語と国文学』昭55・5)
- △後記▽
- 脱稿後、第五節四で触れた『再昌草』の用例は、既に安田純生氏「能因の「入相の鐘」の歌」(『白珠』30の8||昭50・8)に指摘があることを、川村晃生氏より御教示いただいた。